

imagine

この街のこれからをイメージする

「こんなことをしてみたい」「あんなことができるかも？」
そんな自由な発想で、この街の未来を描いてみるコーナー。
「今(を生きる)人」×「image」×「zine(個人が自由に発行する冊子)」!

ご意見・ご感想
座談会参加者募集中!
バックナンバーもこちらから

<https://mamaplanodate.net/imagine/>

編集: 島田真紀子 (mamaplan) / 取材・執筆: 丹波桃子
デザイン: さわたのりこ (ねっこ編集室)



学校以外の 子どもの居場所



「ほくろく」と「まわり」の化学反応⑤

他の土地の気になる活動や人から着想を得て、北鹿地区に住む人びとが自由に話し合う座談会企画! 第5回のテーマは「子どもの居場所」。五城目町にある10代のためのデジタルテクノロジーの拠点「ハイラボ」を参考に、子どもたちが安心して過ごせるサードプレイスの必要性和、学校以外の学び、そして街の未来について語り合いました。

まわりの「今人」

ハイラボ

(代表: 松浦真さん/五城目町)



「デジタルテクノロジーで遊んで学び、仕事をつくる」がコンセプトの、10~18歳なら誰でも無料で利用できる遊びと学びの拠点。プログラミングや音楽・映像制作、デザインなど、メンター(相談役のスタッフ)と一緒にさまざまなことに挑戦できます。制作物は朝市やガチャガチャ、地域のコミュニティスペース等で販売し、働く意味を幅広く捉える経験が得られます。

代表の松浦さんは、学校だけでなく地域やコミュニティを通じて多様な学び方を探究する「ハイブリッドスクーリング」を提唱。学校に行っていない子どもも社会と繋がりを持ち、将来をデザインできるのがハイラボの魅力です。「デジタルテクノロジーなら大人と子どもが対等になれる。自分の作品が誰かの役に立つ・認められるという経験を通して、自己表現と社会貢献の大切さを実感してほしい」と話してくれました。

ほくろくの「今人」

ともえさん

(武田知愛さん/大館市)
昨年11月、大館市新町に同市初の民間学童施設である「Shunkodo(春光堂)」をオープン。



あゆみさん

(菅原あゆみさん/大館市)
7歳の女の子と5歳の男の子のママ。地元・大館が大好き。ママ目線で子どもの居場所について考える。



みなこさん

(斎藤美奈子さん/北秋田市)
合同会社アニーク代表。「がっこステーション」の運営サポートのほか、地域のさまざまな事業を手掛ける。



今月のおやつ

秋月(大館市)

・家紋最中 ・水ようかん



1. 自己紹介

みなこ 2022年に秋田内陸線比立内駅の駅舎の一部を改装し、コワーキングスペース&地域のコミュニティ広場である「がっこステーション」を立ち上げました。現在は、(一社)大阿仁ワーキングの理事として、同施設の運営・管理を行っています。漬物加工所も併設していて、冬は地域のお母さんたちが漬物作りをしています。

ともえ かつて祖父母が営んでいた文具店をリノベーションして、民間学童施設をオープンしました。保護者が就労してなくても利用でき、夜7時以降や短時間の預かりにも対応しているのが、公立の学童施設との違いです。

あゆみ 高校卒業後、都会に憧れて上京しました。その後関西地方にも住みましたが、「やっぱり自然豊かな大館が一番好き、大館で子育てがしたい」と感じてUターンしました。縁あって地元の人と結婚し、現在は働きながら、年子の姉弟を育てています。

2. 地域に必要な居場所

みなこ がっこステーションに、移住してきた小学生の子が最近よく遊びに来てくれるんです。そういう関わりを通して、私自身が地域の子どもたちにとって安全なサードプレイスでありたいと思うようになりました。

例えば家を飛び出したくなった時に、「みなこさんの所に行こう」と思ってくれて、たわいもない話をして過ごせるような...。だから、がっこステーションでは子どもの意見や考えを尊重して、そっと見守るようにしています。

ともえ 昔は、学校から帰った時に両親がいなくても、おじいちゃんおばあちゃんがいて、おやつを食べさせてくれたり話を聞いてくれたりした家庭も多かったと思います。核家族化が進んだ今、学童が子どもと保護者のためのサードプレイスになればと思っています。子どもたちは、既に学校や習い事でパンパンに頑張っているんです。だから、頑張らなくてもいい、ホッとできる場所を提供してあげたいと思っています。もちろん保護者が学習を優先させたいという場合は尊重しますが、ここに来たからには、まずはホッとしてほしいという思いで接しています。預かり中は、家ではなかなかできない遊びをしたり、学習を見守ったりしながら過ごします。

あゆみ 私は、子どもには、親のほかにもう一つ安心できる居場所が必要だと思っています。友達だったり、祖父母だったり、親以外の大人だったり、さまざまだと思うのですが、親だけでなくいろんな大人と出会うことってすごく大事だし、その子の心にずっと残ると思うんです。親にできることと第三者にできることは違うので、それぞれ足りないところを補完しあって子育てしていけるような環境が整っている街が理想ですね。

3. 学校に行けなくなった時

みなこ 学校は、心を壊してまで行くものではないと思う反面、耐える力を身につけることも大事なんじゃないかとも思うし、その見極めが難しいですね。

あゆみ 辛かったら無理して行かなくてもいいと思うんです。でも、学校って勉強だけでなくコミュニケーションを学べる場所でもあるので、学校に行けない子が選べる居場所が地域にもっとあったらいいと思います。

ともえ 学校の先生も本当に頑張っているけれど、一人ひとりに細やかな対応をするのは難しい。民間だからこそ「どこまでも付き合うよ」と言ってあげることができるんです。昔は一緒に住んでいるおばあちゃんやおじいちゃんはその役割を担っていましたが、今は親以外の大人が周囲に少ないので、より第三者のサポートが必要なんじゃないでしょうか。

あゆみ その子の得意なこと・不得意なことに丁寧に向き合ってくれる、信頼できる大人の存在って大きいですよ。

みなこ 行政と民間がちゃんと向き合って対話して、それぞれできることで協力し合えば、街の子育て環境はどんどん良くなるはず。お互い文句を言い合うのではなく、一緒にいい街にしていきたいなって思います。

編集後記

子どもを取り巻く環境の変化により、昔とは違うサポートが必要になっていくことに気付かされました。頑張っている子どもたちが心に栄養を蓄え、自由に未来を描けるような居場所の必要性を感じます。

告知

次回10月1日(火)掲載号のテーマは

「チームワークが生み出す力」です

ごぼれ話公開中
チャンネル名
@imagine_hokuroku

